

越前守三善
俊之丞

○十一月十日備前坂井伯元卒

長門軒師也
竟光子小桑井

○十一月廿二日雷より電落く萩八幡地鳴る平雷の如く大地震
戸障子うらみ家小船の大浪ふ動く如く地二寸よりあふより
て五六尺後刻は砂をのりとなあひひきを吹かするもあや
る植松を家流潰す穴流揺おげ死人夥しく泣きけが声樹ふ
置し又高く毟る家より火あり八幡と津波ありて序総人
る多く死に内川一士の身引に成ありけ時より萩交地震あり
お次小田東より夥しく死亡者九二子二百人小田東より内川近
き方又五人房州十万人江戸二万七千人人
内廿九日火災の附あま橋あり
死者のあま七百人といふ
あり一昨日のふ徳り世時深川世三岡重徳の廿二日おとる
ありぬきおとるゆり止むを後十二月まで暮るる志をくあり

西川神代の事をもゆりたまはうとうぬ神代のみを引中隠通は

○十一月廿九日秋大風幸々追分よりお火くくお市まで焼又小糸川より
お火くく北風お隊と神湯へ冬大非雪雪急筋遠橋向柳系淡系芽町
と東の神田より信子町小糸町橋留小綱町幸所へお回向院の辺内川
水代橋までおま橋あの方焼落ぬるお時給る是を世お地震の事
といふ○回向院へお観音像山門お女像一はらり十一月靈爰の
音ありて橋上よりおろす廿二日夜地震の附山門也割をひて
廿九日の大火お徳を焼くり世時本を打退てつらちまたり
徳人依心のあまして系預群集せしとて

一云観音といふ一云お徳
てま会おけいといふといり
○は火事お能人の枝お焚くり「焼ふりりされくも橋さうぬりちま考
梅り番やまの一番お焼見舞 牧童

世年間記事

居けるり別荘の客あり一付臥居るる白むくの修し一橋を入
一ける客の艶あり一とより是を去る然く八羽より一橋小白むく
を去るる事小あり一中花街大合小あり
此書昔の柱女小宮崎丹後
お茶屋長門の橋ありし日の事

是等のことありて客家の例ありし事
八羽小宮崎を去るる事一とより尚考

○幸八町坊三丁目辰紀伴舟を文方書
材本ありて世ありし
紀文とて能書手し 靈巖清後

を去るる事小あり
材本ありて世ありし
お茶屋長門の橋ありし日の事

人の子もく花街難劇小遊ひ種くの場くさま一巨万の家を費
しける事法人の知る所ありし小費せし

○江戸真砂六十帖 元禄中の
事とせし 小歌人指しえとる管町小作と今と
橋本町へ引移るる後り ○玄家集活小り小武に素意思ふら

窪田小太助 小山判官を殺し一とるはと云傳ふ素意橋本の橋

社小小山判官の靈祠あり又素意の坂下海井小半次屋後若松
中屋屋敷の西より小山判官の塚あり一けり中敷抄りて元禄
の頃までありし一崩きて今なきなり侍りしと云く

○元禄中の豪家非田佐久男町小住せし尾実彦清とりのりの
唐弘の親等の立像を得て身請弘福寺に寄付し本年より以て後
意ありすと云る若宮院へ安撫以尾実彦の墓へ若宮院小住
被支拂の像もありしと云 ○元禄中江戸年法を製切と云る

○元禄六年温徳町の江戸繪巻小住二丁目二丁目の方志に所
の遊地も傳る町方志に所遊地あり芝野橋へ飯橋と死りあま
橋の矢の浦の浦とあり一丁目橋の隣へ一あり
この頃天和元年
の江戸記せり 水
乃橋の吉祥も橋とあり今今の島平橋と云は橋とあり
此橋向里
と遊地あり

村松町を筋透山内

山内の跡より連発
町の旧地の内

ありて有店と記せり

村松町八尋
條の邊あり

古の形
あり

昔の志ある橋と今の如くありぬ橋とあり志ある橋の名は今

のよきく小畑町と丁目の先の橋を志す記せり今の山下町を介

ひがやとあり

月十二年の爲め鴻崎橋とあり
又は山内を貫く新山内とあり

上野清の親善堂今今の橋

山と唱ゆる下の山あり大塚後志の門前若田圃あり

○三圍橋社内一丁の狐あり例の遷居の爲め遷居の日の當りかど橋とあり
時とまの狐うらやまをあらわすも 子孫傳や狐あひかり嬉しく とも

室永元年 甲申 二月晦日改元

二月廿七日地震四月まて安く静か

○あむ橋と新大橋のつら小道を付く

去年の大火のあむあむ
人多く死せる由一かのり

○二月年号改元あり一祥吟

室永水の給下りくも色糸の糸

野里公

○五月二日奉国流多味元祖奉国親伝年

小日向流より
下葉り

○六月十五日より七月朔日二日迄を辺大島大川筋を介大島八月

二日より山ありて中総橋より股より押一願一田畑を家より二葉藤

して死七人救を知り奉祈河川流系山若中台辺屋宇をひく

○六月廿二日小畑改元年

室永後二男村十五世の室永年
書をよめし一書一書六十

○七月廿二日より九月朔のまて復あまふ於る土佐山五木山文殊

菩薩開帳あり○八月船人より昇る志年

比十八才二世
の志あり

○九月神田明神社修造あり

○十一月聖堂修再建改元五日迄

○今年あむ橋の治ふ始り歳世傳の見世を
かゝる名ありし一書一書一書一書

同二年 乙酉 比月

二月より回向院より檜州吳波の某所如本家帳

○四月より後必より檜州大沢山久安より親世者一ふ年

月家帳○四月より水代よりいふ分作生海舟才天おられた

親世者兼徳乃波海田山山初家帳○五月江戸川へ渡り

○六月十五日水村季吟翁率 八十二才池のそとに草をひきかきて居る

はの舟あり海世ありわたり「花も見河野云
をいふ事ありは世
後の世よりいふ事 ○七月より回向院より洛東靈山葛河江池家帳

○月家帳法慈より東本園より新地如本家帳

○月家帳よりいふ日海内非家帳

○今年作親字庶法より系清多 指ふらげまりとりしお清金を
取の事ふあり取の文を累してしお

宜に月上旬の洛中洛外童男童女七八才より十に五才ありふいふ事ありしを清せし後
多ありをいふ事あり一級股掌一はくおいふ事あり一はくおいふ事ありしを清せし後
相せり如く妻より後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後
ありて飛を立ちて地におし一凡系清の男一女二二才ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後

洛中有福の族非威を忍びたり或は某公族或は布衣の族の子弟傳傳其苦を
誓ひ其家之末の福族ふたぢりて接糸の用いふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後
族慈の祖をいふ事あり又作親洛の布衣の族の子弟傳傳其苦を誓ひ其家之末の福族ふたぢりて接糸の用いふ事ありしを清せし後
又秋七八月よりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後
りしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後
後を人つらなくゆり一法あり又いふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後
一大豆をそのとて養ひて一不忽大麻と愛せしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後
記して室永千歳記と題せしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後
志願よりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後
是ハ程を清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後
くしてを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後
まづ清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後
るわ

○七月廿六日官医武田告仙率 長壽院と厚沢 所
東海の中少林院と兼

○十一月廿日教皇刻よりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後

三町計りいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後傳はしよりいふ事ありしを清せし後

○十二月廿日官医武田告仙率 今も市中に告仙の
くわりの長四郎あり

寶永三年 丙戌

正月二日 陽作 柳系 玄輔 卒

名 兼綱 号 望海 禄 小左衛門 候 河 柳 田 夏 子 子 兼 也

○正月十日 和子 刻 津田 須田 町より 火入りて 筋 遠見 附 土手 町

在 津田 町より 本 町 石 町 通り 小 橋 町 河 津 町 大門 町 長 谷 川 町 和

泉 町 家 津 町 辺 新 大 坂 町 新 材 本 町 迄 通り 火 入 り 焼 亡 した 翌 日 十 日

辰 刻 終 了 ○正月 十八 日 圓 向 院 火 災 火 入 り 焼 亡 した 翌 日 十 日

せし 紫 五 十 年 忌 吊 法 事 あり ○二月 廿 日 夜 亥 刻 南 原 宿 町 火

入 り 南 山 庄 町 東 為 二 町 焼 焼 亡 した

○正月 十日 和 子 の 本 年 臘 卒

之 田 氏 名 兼 綱 号 望 海 禄 小 左 衛 門 候 河 柳 田 夏 子 子 兼 也

○正月 十七 日 儒 作 栗 山 潜 卒

名 德 林 源 助 弱 吟 吟 号 小 左 衛 門

○六月 元 字 令 吹 智 あり 是 を 宝 字 報 たり

○七月より 根 津 権 現 社 内 所 火 災 再 興 十 月 成 終 了 舊 地 火 災

り 國 子 坂 の 新 あり ○七月 廿 二 日 大 雷 敷 火 災 あり

○八月 特 許 松 林 博 法 園 田 植 の 歌 金 五 八 博 宮 一 掲 げ

○九月 十 五 日 亥 刻 大 地 震 ○十月 九 日 医 師 藤 生 方 菴 卒

名 兼 綱 祖 孫

の 父 之 三 田 長 松 子 兼 也 ○屋 敷 松 百 穂 不 極 了

○十一月 十 六 日 己 刻 谷 作 町 より 火 入 丁 半 焼

○同 月 廿 日 夜 子 刻 和 泉 町 焼 たり 火 入 大 坂 町 辰 吉 町 意 丸 町 町 堀

町 葺 屋 町 火 災 芝 居 本 町 長 谷 川 町 火 災 火 入 火 災 火 災 火 災 火 災 火 災 火 災

五 町 計 火 災 焼 亡

同 日 年 丁 亥

正月 廿 二 日 陽 作 柳 系 玄 輔 卒

徳城の事あり ○正月十五日申申刻溪町新同心町よりお火事所一の
橋舟才てあより申のハ業平天那の社を元小橋ふりて宮中別儀の

○二月晦日船人榎幸兵衛角率 四十七才 号宝晋舟
二舟棧上行きと申す

○二月八日大火あり 申正保福小江り お抄下
未詳 ○保康朝慈正山虚を
流井田向院にて冥塔 ○九月廿二日東叡山勸学院より新塔於寂

○七月二日山谷重福寺の持持法華宗寂 其儀の日は田来とりの
甲及流宮受ふる者一人

○八月朔日小石川を焚き捨辺よりお火燭にぬ町を三平町程に焼た

○九月は日徳谷安左衛門率 徳谷を法する小墓あり牌の右小実相すお月名夜
の園をてつひんを ちくくも浮世のやまの果もや
思ふくはりれ

○九月廿七日儒師松浦交羽率 六十に才も黙縁友立而
日暮至し南を飛す小葉

○十月十二日船人服部嵐雲率 五十に才約は常松も小葉存す是釋世の句
一葉お咄ひとむちる風のよ

○十二月十六日連舟作里村島陸率 六十九才

○徳國銀れ古幣止あり

○十一月廿日より宮古山の根くく頂をりには焼く天晴く雲声地震

騒くく雲声白灰降りて雪の如く地を埋むる南嶺よりおびりり

あり白晝晴夜のさくく小浜の燈籠挑灯をとりて廿二日強ふま

廿三日より天晴を皎日を洋く法人安塔をとりて廿五日廿六日

再び天曇り砂降り雲声の如き雲声地を震あり是より雲灰降

廿八日平常の如く此時おまをく山を宝永山とりの世人は以て噴噴

を喜ぶ いふ折煙寮小戸をえりり竹若宮古山焼る例は延暦十九年二月廿二日より
四月十八日と今年のおく焼員親元年五月十路日焼ると云く

○十一月廿八日法人五雲寺空率 乙田小山
大聖寺空率

宝永六年 戊子 正月空

正月元日大お ○宮正月二日武彦相持三河玉く砂降

○三月地上小白毛を生じ ○三月初元彦信忠田彦助といふ人

武良入弓那塔あつちむら兼村塔あつちむら兼井の田蹟久しく處を失人のを欲き

る標を垂傍小牌を建てる ○二月朔日桑人山田宗編率八十五才

本本類と地中長巻と小葬は子久周子 ○二月御入芳安一冊率一才小室永

二人有山田久能家屋せ弱種家屋と云三年と云 ○五月十又猿よりめて通用始る

長中梅多活の妻小室永通室妻の輪小田久世邦と ○深川の舟門世下地産正元金綱丈の地産を六部を造る

と今年より始て江戸と初小安す上南品川小川と今今年 山谷本孫

寺宝永七年 巳谷春字と正徳二辰 粟鴨と正徳四年 深川靈巖と

同新永代と享保五年 ○冬より麻疹流行

○十月廿二日算洲の作園彩助孝和率号 自中園流祖

○後寺原新本池佛觀世者室帳年此法橋と云率

○十一月十五日深川八幡宮法造堂延宮 ○十二月二日将野隨川岩伝

率正十七才 ○十二月廿二日午後十代麻屋と率八十二才

○十二月谷中殿敷と今のの隣と空世乃店室小尚齒合あり

此時海辺幸店百廿七才あり上舟あり椅子小よる妙人等派の

傍二人は常衣信人素袂袴あり長長衣春秋風正老門外月日

席の着の古実ありと幸幸店公奉必振及生玉渡河之天正十年壬午小せり仕官の比へさ

の勢切あり仕を掃くと後後報しく唐土小のり天竺那蒙陀を始と殿の法政を分人分り

九十九才の時辰朔一室永八年壬申 同小云幸店老人の改小人八十才米のせり

と云くは海邊り中上方八十才ありと云くは八十の人と書て米ありと云り

宝永六年 己酉

正月十九日浅通用止 ○去年十月廿二日の後鳥渡り以二月十二日

夜ふとくく鳥渡り折焚き ○二月漏夜河邊上舟免

○二月三日より七月二日まで深川八幡宮室帳

○六月室字報通用ありまる

○七月より九月まで日向院より洛東津院迄不動尊実帳（奉りケル）

○九月より朝湖序々ありさる後英一様と号し（洛川長富町）

○十二月廿二日能人小澤博八率（奉新町坊正なり）

○後辺事店対話記成（杉本宮澤）

室永七年 庚寅 八月國

二月上野清の稱を社儀草約形に移す

○二月ニツ宝銀法改（改）○三橋大木戸石垣を築せしむ法なる

札協定（改）○湯田は守宗刻開山本食家宮上人あり（享保三月）

遷化（改）九十（改）○其回向院より稱を寺作如來宗修（改）

○二月十九日南田川本母と梅屋九七百世二年忌大念佛回向

抄る小塚託小房の貞元元年（改）○二月より五月まであるまで永代よりおぼけてある

岩城愛服の孫池系朝々持守（改）○其の親世言又且摩の不動尊

関帳○二月より五月まで深川公行守と菟包の所へ海泡をへ

并波仲公軍陣の事いふ事親世言○二月月不動尊の修す存才

天宗帳○二月乾金并ニツ宝銀通用始り即宗刻通用止

○七月十一日薩摩守刻立の松雲禪師寂（改）

○七月より室八月まで市谷八幡宮境内より洛東津院迄編りて虚

空宗宗帳○九月廿一日芝口門法統よりあり徳人修持

日比谷二丁目より三丁目まで其口二丁目二丁目三丁目と改り

○十月十日亥刻池上本門を焼亡（改）

○十一月既球人奉納（改）○武蔵守小公奉納（改）